

中之島地域の「未来医療国際拠点(Nakanoshima Qross)」を契機とした 国際化とまちづくり



地域交流

横山 英幸*

Internationalization and Urban Development of the Nakanoshima Area
Initiated by the "Nakanoshima Qross" International Center for Future Medicine

Key Words : Nakanoshima, International Center for Future Medicine, Naniwasuji Line,
International Competitiveness, Public-Private Partnerships

はじめに

大阪市北区に位置する中之島地域は、堂島川と土佐堀川に挟まれた水と緑豊かな環境を有しており、水都大阪のシンボルとして親しまれてきました。また、古くから経済・文化・行政の中心として発展し、現在はビジネスの中核機能などが集積しています。

これまでの業務・文化・MICE機能の集積に加え、大阪中之島美術館や未来医療国際拠点の整備を核に、なにわ筋線の開業を契機とした未利用地の土地利用

転換を促進し、これらが連携・調和し相乗効果を発揮するまちづくりを進め、国際的な業務・文化・学術・交流拠点の形成を図るとともに、風格ある歴史的建築物や文化施設の集積や堂島川と土佐堀川に挟まれた水辺の魅力を最大限に活用し、水・みどり・光を活かした水都大阪のシンボルとなる拠点エリアの形成をめざしています。



堂島川からみる中之島3・4丁目周辺



* Hideyuki YOKOYAMA

1981年5月生まれ
関西学院大学経済学部 (2004年)
現在、大阪市 大阪市長

大阪市のまちづくりの方向性と中之島地域

大阪府・大阪市 (以下、それぞれ「府」・「市」という。) では、大阪・関西万博の成功とその先にある大阪経済のさらなる発展をめざし、大阪の拠点創出に注力していくこととし、多くの人が集まり、活気にあふれ、魅力あるまちづくりを進めています。

これまでの、うめきた開発をはじめとした大阪駅

周辺や御堂筋沿道、なんば、天王寺など、いわゆるキタやミナミといった南北都市軸のまちづくりに加えて、東西都市軸の強化にも力を入れており、ニシのベイエリアでは、世界最高水準の成長型IRの開業を目指すとともに、万博跡地活用など、新たな国際観光拠点をめざす夢洲地区のまちづくりを、ヒガシでは、大阪城公園周辺として京橋地区のまちづくりや、「大学とともに成長するイノベーション・フィールド・シティ」をコンセプトに、新たに森之宮キャンパスを開設する大阪公立大学を先導役として大阪城東部地区のまちづくりを推進しています。

中之島地域は、これら東西・南北の都市軸が交わる重要なエリアに位置し、世界で存在感を発揮する拠点エリアのひとつとして、国際的な業務・文化・学術・交流拠点の形成を図るとともに、水・みどり・光を活かした水都大阪のシンボルとなる拠点エリアの形成をめざして取組を進めています。

中之島地域の東部エリアでは、都市公園である中之島公園、その周辺には大阪市中央公会堂や大阪府立中之島図書館、大阪市立東洋陶磁美術館、こども本の森中之島といった風格ある歴史的建築物や文化施設が集積、西部エリアでは、中之島2丁目・3丁目を中心に、ビジネスの中核拠点となる高層オフィスビルや劇場を含む業務、宿泊、商業機能を備えた多機能高層ビルが集積しています。

さらに、中之島4丁目と5丁目の間には、2031年春になにわ筋線が開業予定であり、新駅が設置されることで、関西国際空港や新大阪をはじめ、梅田、なんばといった主要ターミナルと直結し、ビジネスエリアとしてのポテンシャルが飛躍的に向上すると考えられます。中之島5丁目では、このなにわ筋線開業を契機として、現在、民間事業者により土地区画整理事業が進められており、今後、国際的な拠点形成をめざし、周辺土地利用や都市開発がますます進展することを期待しています。

また、風格ある歴史的建築物や文化施設の集積、堂島川と土佐堀川に挟まれた水辺の魅力を最大限に活用し、公民連携による親水空間の整備・運営や舟運のさらなる活性化によるにぎわい創出に取り組むとともに、歩行者専用道等の整備による歩行者ネットワークの充実・拡充、エネルギーの面的利用や災害に強い安全・安心な業務継続地区（BCD）の構築等といったまちづくりの取組も進められています。

こうしたなか、中之島4丁目では、2022年2月に大阪中之島美術館が開館、その隣接地では最先端の未来医療の産業化とその提供による国際貢献を推進する拠点として、2024年6月に未来医療国際拠点（Nakanoshima Qross）が開業し、国内外より注目されているところです。



図1 大阪の都市軸と中之島地域のまちづくり

未来医療国際拠点 (Nakanoshima Cross) の形成について

未来医療国際拠点が位置する中之島4丁目には、元々大阪大学医学部や歯学部などがあり、これら大阪大学跡地について、本市は、(仮称)近代美術館、広場及び文化関連施設等の整備を目的に土地を取得し、現在の大阪中之島美術館や未来医療国際拠点の開業につながっています。

未来医療国際拠点は、最先端の未来医療技術の産業化と国内外の患者への未来医療の提供による国際貢献を推進することを目的に、医療機関や企業、スタートアップ、支援機関等がひとつ屋根の下に集積する、他に類を見ない未来医療の産業化拠点として、2024年6月に開業を迎えました。

この拠点の形成については、2016年4月に大阪大学総長との会談において、総長から中之島4丁目において大阪大学の知を活用した文化・学術的な拠点としていきたい旨の提案があり、これに賛同したことに始まります。

その後、同年8月に大阪大学より、府、市、経済界に対して、文化・芸術・学術・医学の発信拠点となる中之島アゴラ構想の提案があり、11月に、

本市が事務局となって、「中之島アゴラ構想推進協議会」と「中之島4丁目再生医療国際拠点検討協議会」の2つの協議会を設置しました。

これらの協議会において約2年にわたって検討を深め、このうち、中之島4丁目再生医療国際拠点検討協議会では、2018年8月に「未来医療国際拠点基本計画(案)」を策定し、この基本計画案のなかで、未来医療の臨床研究から実用化・産業化までを一貫して進める世界に開かれた国際的な拠点として、「未来医療国際拠点」の実現を図ることが示されました。

未来医療国際拠点の実現にあたっては、府、市、民間事業者等が連携して事業を進めてきており、再生医療等製品の開発・提供が迅速に進むことで、従来の手法では治療の困難な国内外の患者に道を開くことができ、本拠点を通じた国際貢献を果たせるとともに、市民に対しても最先端の医療や検診が提供されるなど市民サービス向上にもつながるものとして期待でき、この拠点を整備する意義のひとつと考えています。

未来医療国際拠点の運営スキームについて

未来医療国際拠点の実現にあたっては、未来医療分野の最先端の知見・技術を要することなどから、整備にあたっては、建物を運営する事業者と、整備・所有する開発事業者を分ける、民設民営の事業スキームを導入しています。

運営については、拠点全体のオーガナイズを図るため、府が設立支援を行い、民間企業が主体となって、2019年に(一財)未来医療推進機構を設立し、この機構が施設を一括賃借(マスターリース)しています。

一方、この受け皿となる建物については、市有地を活用して整備することとし、本市において、建物を整備・所有する開発事業者(日本生命保険相互会社、関電不動産開発株式会社、京阪ホールディングス株式会社)を選定し、2021年11月より新築工事に着手、2024年1月に竣工しました。

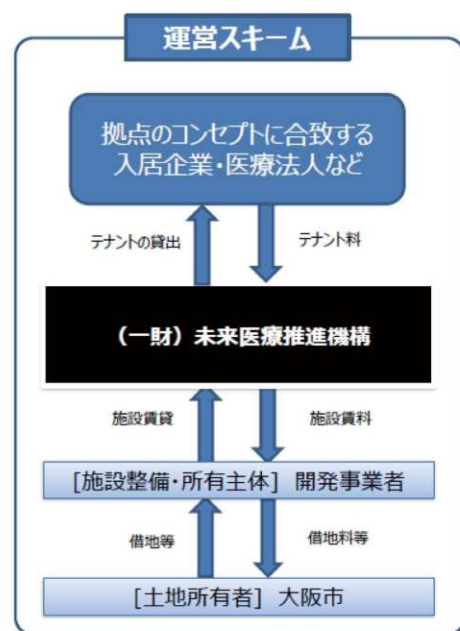


図2 未来医療国際拠点の運営スキーム

未来医療国際拠点の機能・取組について

前述のとおり、未来医療国際拠点は、ひとつ屋根の下に各種施設や機能が集積する他に類を見ない未来医療の産業化拠点であり、「未来医療MEDセンター」「未来医療R&Dセンター」「中之島国際フォーラム」の3つの施設(エリア)で構成されています。これら施設は、それぞれ、未来医療の「実践」「創造」「共有」の役割を担い、世界から多様な人材と最新の情報が集まり、つながる仕組みが備えられています。

未来医療MEDセンターには、高度健診センターや病院、クリニックなどの未来医療を「実践」するための機能、未来医療R&Dセンターには、産学医連携スモールオフィス・インキュベートスペースや、企業が入居するリエゾンオフィスなどの未来医療を「創造」する機能、中之島国際フォーラムには、カンファレンスセンターや交流・共創・発信の場などの未来医療を「共有」するための機能を、それぞれ有しています。

入居する企業や医療機関等が連携することで、「実践」「創造」「共有」の役割をサイクルさせ、再生医療をベースに、ゲノム医療や人工知能(AI)、IoTの活用等、今後の医療技術の進歩に即応した最先端

の「未来医療」における産業化を推進すること、及び国内外の患者に対する「未来医療」の提供を通じて国際貢献を推進することが、未来医療国際拠点のめざす姿です。

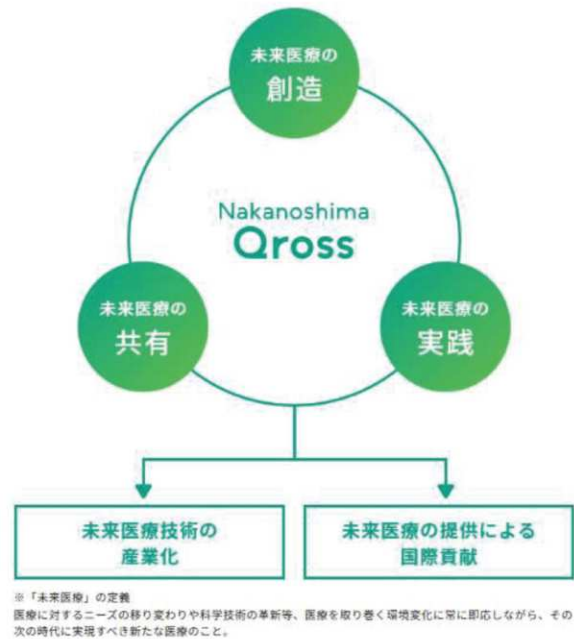


図3 未来医療国際拠点のコンセプト1



図4 未来医療国際拠点のフロアマップ²

こうした機能を有する拠点においては、今後さまざまなイノベーションが生み出されることが期待されますが、具体的な取組のひとつとして、(公財)京都大学iPS細胞研究財団が、自家iPS細胞の製造・提供拠点を開設し、製造期間の短縮、品質管理の効率化、大幅なコストダウンによる再生医療の普遍化をリードする my iPS プロジェクトを進めていくこととされています。

また、大阪大学との連携体制のある多様な疾患領

域の医療機関が集積することで、エビデンスレベルを高める臨床研究の促進が期待できるとともに、細胞培養や保管、輸送、分析検査等といったサプライチェーンを構成する多様な企業が先駆的に集積することで、医療機関・企業をサポートするサービスも展開される等、最先端の医療技術の創出、実装に向けたプロジェクトが、この中之島、未来医療国際拠点において進行していくことになります。

今後の中之島地域のまちづくりについて

府市では、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、本年4月13日から10月13日まで開催する大阪・関西万博との相乗効果を図りながら、万博を契機に、健康・医療分野で世界に貢献することをめざし、取組を進めています。

万博そのものの成功はもちろんのこと、万博を一過性のイベントで終わらせず、その成果を今後のまちの発展や都市格の向上につなげていくことが重要であり、そうした意味で、本市は府とともに、大阪・関西万博を都市戦略の延長線上にあると位置づけ、その開催や理念自体が、今後の大阪の発展にとって極めて重要な無形のソフト・レガシーになると考えています。

そして、大阪・関西万博後に速やかに大阪の成長に向けた取組を実行に移すため、「万博レガシー」の継承や「世界で存在感を発揮する国際都市・大阪」の実現をめざし、都市魅力・観光やイノベーション等をテーマに新たな大阪の成長戦略「Beyond EXPO 2025」の検討を、現在、府市が一体となって進めているところです。

この成長戦略のなかで、まちづくりの分野においては、健康医療関連のリーディング産業化や、国内外からの集客力強化、さらには大都市の発展には欠かせないイノベーションの創出を柱に掲げており、この戦略の下でさまざまな都市開発を積極的に推進していきます。

こうしたなか、未来医療国際拠点が、エビデンスに基づいた安心安全な再生医療の実装場所として機能し、加えて、万博開催時には会場外パビリオンとして、万博会場とも連携を図りながら、大阪・関西

のライフサイエンスの潜在力や拠点の魅力、再生医療やiPS細胞の可能性を、この中之島、未来医療国際拠点から国内外へ発信していくことが重要となります。

未来医療国際拠点が世界に開かれた拠点として、多様な人材や最新の情報が集まりつながり、未来医療の「実践」「創造」「共有」の取組を通じてオープンイノベーションを推進し、再生医療の普及と産業化を進展させることにより、未来医療国際拠点のみならず中之島の持つエリアブランドや付加価値を高めることとなります。さらには関連企業の集積や周辺民間開発の促進にもつながる等、この拠点が中之島地域のまちづくりの進展に大きく寄与することと確信しています。

このような今後の動向を的確に捉えつつ、なにわ筋線の開業を契機として、中之島地域がめざす「国際的な業務・文化・学術・交流拠点」の実現に向け、官民が連携し、まちづくりを進めてまいります。

参考文献

- 1 (一財) 未来医療推進機構「Nakanoshima Qross についてー施設の特徴」
(<https://www.nakanoshima-qross.jp/about/>)
- 2 (一財) 未来医療推進機構「Nakanoshima Qross 施設情報ーフロアマップ」
(https://www.nakanoshima-qross.jp/facility/?id=floor_map)